

観光文化の創出とリノベーション

—台北市迪化街の事例から—

長谷川 清

Renovation, tourism culture and representations : A Case study of Dihua Street in Taipei City

Kiyoshi Hasegawa

This paper examines the relationship between tourism culture and tourism representations in the influential Taiwan travel guide books written in the Japanese language, focusing on Dihua Street located in the Dadaocheng area of Taipei City. This old street has much historic architecture of different construction dates as cultural heritage, and today this street has become a popular tourist spot in Taiwan. The reason is that the local authorities and the inhabitants have preserved the historical environment and nostalgic atmosphere of this area, while at the same time has enhanced attractive features through the renovation of old buildings. I analyze the usage of the term “retro” and its tourism discourse, and clarify how it has influenced tourist activities and cultural productions.

Key words : tourism culture, representation, renovation, retro, travel guide book

I はじめに

文化を「資源」として捉え、それが現代社会における複雑で錯綜した文脈の中であって、いかなる変容、再生、再創造の過程を辿っているか、どのような文脈の中で利活用されて新たな位相を示しつつあるのかを明らかにすることは、文化の比較研究にとって極めて重要なテーマである。とくに、観光という分野では、そうした資源論的な視点からのアプローチは有益な方法であり、フィールド調査に基づいた事例研究が多く報告されている。以下、観光スポットや観光空間において、様々な主体によって営まれる文化実践や表象行為、有形・無形の文化的な生産物の総体に対して「観光文化」と大まかに括ったうえで、今日、個別的な特定の観光スポットにおいて進行している歴史的景観の保存や古くなった建築物の改修・転用（リノベーション）の問題を検討する。それは、魅力的な観光空間を創出することによって、雇用の確保や経済の再生、コミュニティの再活性化をはかろうという点で、文化と経済の双方に関わっており、その実態を明らかにすることは重要な課題である。

近年、台湾では歴史的景観の保全に対して高い関心が集まっているが、リノベーションという手法が積極的に用いられている。「老街」と呼ばれる古い街並みや歴史的景観を保持した商業街・街区の観光開発が各地で進められているのである [張 2018、莊 2017 (2012)]。小論では、台北市における「老街」の代表格と目され、観光スポットとしての再編が進む大稻埕エリアの迪化街を対象に、日本語版の旅行ガイドブックでの記述内容に注目しつつ、台湾における歴史的景観保全地区の観光地化とそれに伴う観光文化の動態、リノベーションによる新たな観光スポットの創出、観光メディアなどの関係性について検討する。

II 大稻埕の「歴史」と景観形成

大稻埕は現在の台湾・台北市の大同区付近の地域名称である。台北市の行政区域として機能しているものではない。大稻埕とは「稻を天日干しする広場」を意味するとされ、福建省などからの移民が開発した艋舺（現在の台北市万華区）の移民社会の発展・拡大と関わる、淡水河に面して形成された貿易集散地（淡水港）と商業地区である。1853年、艋舺において泉州出身の同安人（下郊）と三邑人（頂郊）との間で発生した械闘（頂下郊拚事件）がきっかけとなり、同地区は発展してきたとされている。すなわち、この争いに負けた同安人はリーダーの林佑藻に従い、媽祖と霞海城隍爺のご神体とともに大稻埕に移住したが、その後、林氏らは淡水河に港を開設（1860年）した。また、宗教的結集の拠点として台北霞海城隍廟、大稻埕慈聖宮を建立した。

淡水港の開設は、大稻埕を台湾北部における貿易ネットワークの主要拠点へと発展させた。とくに、1885年以降、外国人居住区が設けられ、洋館や領事館などが建てられると国際的な貿易拠点としての役割を強めていったが、日本統治時代には茶葉などの乾物や漢方薬、布地などを扱う問屋街（現在の迪化街）の性格を強めていく。こうした歴史的展開において、大稻埕・迪化街には今日、閩南式（1850年代）、倣洋楼式（1870年代）、洋楼式（1890年代）、バロック式（1900年代）、近代建築式（1910年代）の5つに分けられる建築物（括弧内は建設時期）が建てられ、「亭仔脚」と呼ばれるアーケードとともに特色ある歴史的景観を形成するに至ったのである〔五島 1999、李・波多野・周 2012〕¹⁾。

III リノベーションと観光文化

国民党政権のもとで、台北市は一定の経済発展を遂げたが、都市の再開発が推進されていくことになる。これに対し、迪化街は旧来の狭隘な

幅員の街路が発展の障害となって、1970年頃から衰退が始まった。その改善を図るべく、1977年に台北市政府の側から道幅を広げるという再開発計画が提案されるに至った。しかし、同地区の住民たちはこれを望まず、歴史的景観と旧来の建築物を保存することを強く主張、反対運動を起こした。1987年から「樂山文教基金会」が中心となり、「我愛迪化街」保存運動を推進していったのである²⁾。

台北市政府はこうした中で、同地区の歴史的景観の保全政策へと方向転換し、「大稻埕歴史風貌特定専用区計画」（2000年）を策定していく。「容積率移転」とよばれる方法で、地権者に建築物の保存と修復を奨励し、歴史的景観の保存と、それらを資源として活用した観光地化を進めることにしたのである [美吟・浅野・浦村 2005、片岡 2018: 266]³⁾。

2009年、台北市政府は知識人や民間企業主、地元住民らの共同によって「大稻埕旧市街再現計画」を策定し、それを実行に移したが、歴史的建築物が多く残る迪化街は象徴的な存在でもあった。台北市政府による歴史的景観の保全政策や伝統文化の復興・保存運動の推進は、大稻埕エリアの歴史的建築物をリノベーションする民間側の動きを活性化することになった。「世代群 (Sedai Group)」という文化創業グループが組織され、歴史的建築物として指定を受けた「屈臣氏大薬房」の建物を改修、複数の店舗が入った複合的な商業スポットである「小藝埕」を2011年にオープンした。これ以後、「民藝埕」（2012年）、「衆藝埕」（2013年）、「学藝埕」（2014年）、そして「聯藝埕」（2014年）が次々にオープンしたが、これらにはレストラン、カフェ、雑貨店、陶磁器店、書店、工芸品店、小劇場などが入り、迪化街の雰囲気刷新していくことに寄与していくのである [TRAVELLER Luxe 旅人誌編輯室 2016、王 2015]。

こうした迪化街のリノベーション事業を創始したのは、「世代群」という企業グループを創始した周突成という人物である⁴⁾。世代群は、正

式名を「世代文化創業群」と称しているが、文化伝承とイノベーションを目的に、起業者の育成や若手のクリエイターの支援、系列下にある事業単位の経営・管理などを扱っている。2016年の時点で、①世代文化創業公司、②世代陶瓷公司（陶磁器・工芸品の設計製作）、③世代街区公司（歴史街区の経営管理）、④世代戯台公司（パフォーマンス・芸術産業、飲食サービス）などの部門を包括し、その支援や共同経営を行っている企業者は40以上に及ぶ。

彼は1967年に台北市に生まれ、政治運動家、作家としても活躍しているが、かつて行政院政務顧問、総統府諮議などの要職にも就いた経験をもつ。台湾の学生運動を経験した世代であり、オピニオンリーダーとして活躍したが、著作物も多く、その内容は憲政、外交、兩岸政策、メディア、文化創業など、多岐にわたっている。彼は、大稻埕エリアで始まった台北市政府と民間の取り組みによる歴史的景観の保存に大きな関心を寄せる一方、こうした歴史的景観の保存運動は風情や外観などの外部的な側面だけではなく、ローカルな伝統をイノベーションと結びつける必要があると考えた。

彼の理念は、迪化街の開発において小藝埕の創設という形で結実していくことになる。すなわち、大稻埕の活性化において必要な措置は、伝統的な5つの業種——茶、布地、農産物（漢方・乾物）、地方物産店、戯曲（歌仔戲、南北管音楽、布袋戲）と建築物を結びつけることだと主張し、イノベーションによる事業展開を企画したのである。具体的には、それぞれの業種の関連しあう産業が互いの欠落部分を補填するために、それに関心を持つ実業者や経営者に参画してもらうという方式を採用した。事例を挙げてみたい。台湾では、紡績業の製造面は非常に強い。しかし、生地デザインはまだ十分とは言えない状況であると判断し、歴史的建築物でもある小藝埕にプリント生地の店舗（「印花染」）に入って

もらった。また、大稻埕には茶葉の販売店はあるもお茶が飲める茶芸館はなかった。そのため、カフェとして「ASW TEA HOUSE」（小藝埕2階に開業）、「南街得意」（民藝埕2階に開業）を配置したのである。このようなプランニングによって事業展開していくが、小藝埕（2011年）から始まったイノベーション事業は「民藝埕」（2012年）、「衆藝埕」（2013年）、「学藝埕」（2014年）、「聯藝埕」（2014年）へと拡大していき、迪化街をイノベーションによって新たな要素を付加した観光空間へと変えていった。それは茶芸館、カフェ、陶磁器店、布店、物産店、書店、果物屋、工芸品、小劇場など、多様な業種からなっている〔殷 2016〕⁵⁾。

IV 観光空間／文化と表象・イメージ

1 迪化街のイメージ

迪化街の歴史的景観は「観光のまなざし」〔ジョン・アーリ 1995〕によって資源化されてきた観光スポットの典型である。アーリは、現代観光は個人の日常と非日常の根本的差異の上に成り立っているとし、日常から離れた異なる景色、風景、街（町）並みなどに対して「まなざし」を投げかけることが観光を成立させる要件であると説くが、台湾旅行のガイドブックで具体的に確認してみよう。観光対象への視線について言及している記述として、「時代を感じさせるアーケードの下にはレンガ造りの商店が続く光景は、文化財としても貴重な存在で、19世紀末から20世紀初頭にかけて港町として繁栄した往時をしのばせるエリアとなっている」（『いい旅・街歩き⑧ 台湾』、2003年、成美堂出版、74頁）や「古い街並みを眺めながらショッピング三昧が楽しめる」「100年以上前の古い建物も多いので、そぞろ歩きし、建物を見学するのもいいだろう」（『空旅Style 台湾』成美堂出版、2015：104頁）（下線、筆者）などを挙げておこう。

このように「観光のまなざし」は旅行ガイドブックの記述には不可欠なものである。日本の旅行ガイドブックは独自の展開を遂げてきた点が指摘されているが〔小牟田 2019〕、観光情報誌の『るるぶ』（JTBパブリッシング）や『まっぷる』（昭文社）では街歩き、グルメ、ショッピングなどについての現地情報を満載している。文字情報の他に、イラストマップやカラー写真などを多用している点で、カタログ的な機能も有している。2000年代以降になると、「女子旅」という旅のスタイルが提唱され、それまでの地図と文字情報が中心であったガイドブックを「女子旅ガイドブック」と呼ばれるカラフルな体裁を特徴とする様式へと変貌させ、今日に至っている〔岩田 2010、高山 2018〕。

以下、この時期の迪化街の変化を『るるぶ』ではどのように紹介してきたのかについて見ていく。表1は2002年から2017年までの『るるぶ台湾』における迪化街の紹介内容を整理したものである。その際、注目したいのは、「レトロ」という語彙がいつ頃から、どのように使われているかである。

レトロは観光スポットを紹介する用語として、国内観光地のみならず、海外旅行向けのガイドブックでキーワードとして多く用いられている。レトロは英語のretrospectiveの略であり、「過去を思い返す、過去に意識を向ける」という意味がある。観光スポットをレトロな対象物とする記述は、日本国内、海外の観光スポットを紹介する日本語版の旅行ガイドブックに共通したキャッチコピーの形式である。歴史や昔を懐かしむ点で、レトロはノスタルジーとも重なり合うが、歴史的な趣のある観光空間やエリア、建物などをおしゃれに表象する用語として近年の旅行ガイドブックでは頻繁に用いられるようになっている⁶⁾。

このレトロによる観光スポットの表象化は2000年代に入って観光メディアに広まってきたが、台湾について言えば、2000年代初めまでは

ほとんど使用されていなかったのである⁷⁾。『るぶ台湾』の検討の前に、JTBパブリッシング（旧日本交通公社出版事業局）その他が刊行した2000年前後のガイドブックの記述内容を確認しておこう。

【資料1】 迪化街は台北市内のなかでも早くから発達した場所で、その街並みにも当時の面影が色濃く残っている。黒ずんだレンガ造りの建物が歴史を感じさせてくれる。ここは台湾最大の漢方薬街として知られ、賑わいを見せている。主に大陸産の薬草を扱っている。その南側は乾物を扱う店が続いており、独特な匂いがただよってくる。（以下、省略）
[『JTBのフリーダム¹⁰ 台湾自遊自在』 JTB出版事業局、1997：98頁]。

【資料2】 迪化街は民生西路が淡水河にぶつかる手前にある、戦前の町並が残る細い通りだ。道の両側に「亭子脚」（テアーカー）と呼ばれる台湾独特のアーケードをもった伝統建築の古い町並が続き、乾物屋や茶舗、雑貨店、漢方薬などの問屋が軒を連ねる。土地神様として信仰が厚い霞海城隍廟から、古きよき時代が残されている貴徳街をぶらつく気分は最高。赤レンガの李春生を記念する教会、茶の交易で知られる陳天來の住宅、茶葉公会の建物などがある。（以下、省略）[『ブルーガイド・ワールド23 台湾』 実業之日本社、1998：38-39頁]。

以上の資料から、2000年前後の時期における迪化街はどのようにガイドブックで紹介されていたかが分かるが、台湾独特のアーケード「亭子脚」をもった伝統的な街並み、レンガ造りの古い建築物が残る、乾物や茶葉、雑貨、漢方薬などを扱う問屋街であり、観光客の目的もそれらの買物が主であったのである。

表1 迪化街の概要紹介

資料名	発行年月日	迪化街のキャッチコピー	迪化街の紹介
るるぶ台湾 '02	2001年 12月1日	乾物、漢方薬が 山積み 下町情緒たっぷりの 問屋街 迪化街を 探検する	台北市の北西、淡水河に沿うように走る迪化街。昔ながらの古い家並みが残るこの路地は、乾物と漢方薬を扱う店がひしめき、狭い通路をふさがんばかりに商品を広げている。(中略)近代化が進む台北に残された古きよき雰囲気を残す問屋街。歩いてみれば思わぬ発見があるはず。(71頁)
るるぶ台湾 '03	2002年 12月1日	昔ながらの 商店街には お買い得がいっぱい	台北駅の北西、淡水河に並走するように続く細い道が迪化街だ。台北が街として生まれたばかりの清の時代に栄えたエリアのため、今の古い建物が残っている。昔ながらの商店街には、布地、漢方薬、乾物問屋が軒を連ね、店内はもちろん、歩道にまで商品があふれている。品質のいい高級食材がどこよりも安く手に入るため観光客の姿も多くなった。(75頁)
るるぶ台湾 '04～'05	2004年 7月1日	いにしえの香り漂う 台北の問屋街	淡水河の水運の集散地として台北の基となった大稻埕に栄えた歴史ある街。いまでも布地、漢方薬、乾物の問屋街として活気に満ちている。(87頁)
るるぶ台湾 '05～'06	2005年 7月1日	昔ながらの 問屋街にはおいしい 素材がいっぱい!	乾物や漢方薬、茶葉などの問屋が集まる問屋街。20世紀初頭に建てられた古めかしい店舗が連なり、旅行者も気軽に買い物ができる。(75頁)

資料名	発行年月日	迪化街のキャッチコピー	迪化街の紹介
るるぶ台湾 '07	2006年 11月1日	台湾美食の素が いっぱい！ 活気あふれる問屋街	台湾名産の乾物や茶葉、漢方薬などの問屋があるのがこの界限。他エリアより安く食材が手に入り、20世紀初頭のレトロな店舗が連なることから、旅行者にも人気が高い。(83頁)
るるぶ台湾 '08	2007年 11月1日	みやげ探しも楽しい レトロタウン	問屋街である迪化街は、台北有数の地区でもある。軒を連ねる店を見上げれば、20世紀初頭のバロック様式の建物だったり、買物に加え歴史散策も楽しめるのだ。散策のメインは問屋巡り。(以下、省略)。(28頁)
るるぶ台湾 '09	2008年 11月1日	縁結びの神様と レトロ問屋街巡り	迪化街は淡水河近くに広がる問屋街で、台北有数の歴史地区でもある。バロック様式の建物や乾物店、漢方店などレトロなお店もずらり。そんなムードある街歩きは、MRT中山駅から南京西路を進み、永楽市場から始めよう。(66頁)
るるぶ台湾 '10	2009年 11月1日	レトロ街を ぶらり散歩	迪化街は淡水河近くに広がる問屋街で、台湾有数の歴史地区でもある。バロック様式の建物や乾物店、漢方店などレトロなお店もずらり。古きよき町並みを散策しよう。(66頁)

観光文化の創出とリノベーション

資料名	発行年月日	迪化街のキャッチコピー	迪化街の紹介
るるぶ台湾 '11	2010年 11月1日	迪化街で レトロ問屋街を ぶらり散策	乾物街として有名な迪化街は台北でも有数の歴史地区で、しっとりした街並みが魅力。このエリアの中心には永樂市場があり、周辺には創業100年を超える老舗「百年老店」や古い廟が多く立つ。庶民派グルメの食べ歩きや、食品みやげ探しにうってつけた。(30-31頁)
るるぶ台湾 '12	2011年 11月1日	迪化街で レトロ問屋街を ぶらり散策	乾物街として有名な迪化街は台北でも有数の歴史地区で、しっとりした街並みが魅力。このエリアの中心には永樂市場があり、周辺には創業100年を超える老舗「百年老店」や古い廟が点在。庶民派グルメの食べ歩きや、食品みやげ探しにうってつけた。(30-31頁)
るるぶ台湾 '13	2012年 11月1日	迪化街で レトロ問屋街を ぶらり散策	乾物街として有名な迪化街は台北でも有数の歴史地区で、しっとりとした街並みが魅力。このエリアの中心には永樂市場があり、周辺には創業100年を超える老舗「百年老店」や古い廟が点在。庶民派グルメの食べ歩きや、食品みやげ探しにうってつけた。(34-35頁)
るるぶ台湾 '14	2013年 11月1日	老舗が並ぶ問屋街を 散策&ショッピング♪	18世紀末に中国からの移民が水運を利用して形成した問屋街。漢方や乾物などの老舗問屋が多く軒を連ねており、レトロな雰囲気。歴史ある建物を見ながら散策するのも楽しい。(30頁)

資料名	発行年月日	迪化街のキャッチコピー	迪化街の紹介
るるぶ台湾 '15	2014年 11月1日	老舗が並ぶ問屋街と 話題の リノベスポット	18世紀末に中国からの移民が水運を利用して形成した問屋街。漢方や乾物などの老舗問屋が多く軒を連ねており、レトロな雰囲気。歴史ある建物を見ながら散策するのも楽しい。(76頁)
るるぶ台湾 '16	2015年 11月1日	レトロビルが 立ち並ぶ問屋街	18世紀末、中国大陸からの移民が水運を利用して形成した問屋街。今も漢方や乾物などの老舗問屋が集まっていてレトロな雰囲気が漂う。歴史ある建築を見ながら散策が楽しい。(98頁)
るるぶ台湾 '17	2016年 11月1日	台湾最大の 問屋街でレトロ散歩	18世紀末、中国大陸からの移住者が水運を利用して形成した台北最大の問屋街。街には茶葉や乾物、漢方などを扱う“100年老店”とよばれる老舗が集まる。19世紀後半に建てられた商館が多く建ち並び、それらをリノベーションした、台北の若者たちが注目するおしゃれなショップやカフェが続々と誕生している。懐かしくて新しい、レトロ建築をめぐりながら散策を楽しもう。(72頁)

(出所)『るるぶ台湾』(JTBパブリッシング)に基づき、筆者が作成。

2 「観光空間」としての特色化

表1に示したように、乾物や漢方薬などの問屋街がレトロを冠した表現用語によって表象されるようになった時期は2000年代であり、2007年前後が境となっていることが推測される。レトロタウン（2007年）、レトロ問屋街（2008年、2010年、2011年、2012年）、レトロ街（2009年）などの用語があてられているからである。表題にレトロが謳われていない年次（2013、2014年）があるとは言え、台湾独特の伝統的な建築物からなる街区に対して、レトロ概念を軸に観光空間としての再定義が始まったと見ることができよう。

こうした観光業界のトレンドの渦中にあり、迪化街は「18世紀末に中国からの移民が水運を利用して形成した問屋街」であることが焦点化され、その歴史性を根拠に、台北有数の「歴史ある地区」「歴史地区」「歴史ある街」という再評価を進め、歴史的建築物の資源化を推し進めていく。その結果、問屋街を構成要素とする店舗や街並みの雰囲気づくりのために、レトロという概念によって観光対象物の審美化や価値づけが図られていく。同時に、それらを散策して歩くことに「レトロ散歩」「レトロウォーク」という用語も使われ、歴史的建築物の鑑賞といった形での観光者の行動（街歩き）を意味づけていくのである（表2参照）。

街歩きを通じての、4タイプ（閩南様式、バロック様式、洋楼様式、現代様式）の歴史的建築物（＝レトロ建築）の鑑賞については、『るるぶ台湾』では2013年まで待たねばならない。しかも『るるぶ台湾』では、2013年発行のガイドブックでバロック様式を2例、洋楼式を1例紹介しているだけとなっている。しかし、その姉妹編とも言える『るるぶ台北』では、2009年と2010年の時点で各タイプの代表的な建築物を写真とともに紹介し、その歴史的価値を解説している。また、同様の内容は『タビトモ台北』（改訂4版、2012年11月1日）にもあり、「街並を

表2 レトロを冠した用語（リノベーション関係を含む）

表現用語	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016
レトロな店舗	○										
レトロなお店			○	○							
レトロ問屋街			○		○	○	○				
レトロな問屋街											
レトロな街並み					○	○	○				○
レトロな建築（物）		○	○								
レトロな街		○								○	○
レトロ街				○							
レトロタウン		○									
レトロ建築								○		○	○
レトロ建物											○
レトロビル										○	
レトロ散歩											○
レトロウォーク								○	○		
レトロショッピング											○
レトロ雑貨											○
レトロカフェ											○
レトロな雰囲気								○	○	○	○
レトロムード										○	
レトロモダンな空間										○	
レトロなお茶空間											○
レトロな映画の世界											○
リノベーション									○		○
リノベスポット									○		
リノベビル											○
リノベカフェ											○

（出所）『るるぶ台湾』（発行年：2006年～2016年）に基づき、筆者が作成。
 2006：『るるぶ台湾'07』（83頁）、2007：『るるぶ台湾'08』（28頁）、2008：『るるぶ台湾'09』（66頁）、2009：『るるぶ台湾'10』（66頁）、2010：『るるぶ台湾'11』（30-31頁）、2011：『るるぶ台湾'12』（30-31頁）、2012：『るるぶ台湾'13』（34-35頁）、2013：『るるぶ台湾'14』（30-31頁）、2014：『るるぶ台湾'15』（76-77頁）、2015：『るるぶ台湾'16』（98-99頁）、2016：『るるぶ台湾'17』（72-77頁）。

楽しむためのレトロ建築案内」という項目を設けて詳しく紹介している(77頁)。

3 リノベーションの進行

2000年に台北市から「歴史風貌特定専用区」に指定されて以来、歴史的建築物の保存や改修が迪化街で進行してきた点はすでに触れたとおりである⁸⁾。台湾で目下進行中の興味深い動きとしてリノベーションが挙げられる。各地では、老家屋を利用したショップやカフェが続々と出現し、話題を呼んでいるが、行政と建物の所有者、民間企業、市民との関係の再構築が重要な課題となっている〔片倉 2018 : 266-268、横山 2019〕⁹⁾。

大稻埕エリアに関して言えば、2009年、台北市政府は「大稻埕旧市街再現計画」を実施し、歴史的建築物が多く残る迪化街を対象に、観光による街区づくりに着手した。世代群による小藝埕の開業はその象徴的な出来事であったが、こうしたリノベーションの動きは日本語版のガイドブックでも言及されている。一例を挙げておきたい。

2011年発行の『わがまま歩き37 台北』(実業之日本社)は、「現在、街はレトロな雰囲気を生かした再開発が進行中で、仮設店舗に移動している場合もあるので注意」(112頁)としている。これに対し、迪化街の紹介において、リノベーションという用語が使われたガイドブックは、現時点での管見の限りでは2015年が最初である。『るるぶ台北'16』(2015年発行)では「洋館や民家をリノベーションした商業施設が増えてきている」(62頁)と記述している。迪化街の観光地化の進展やリノベーションによる新たな観光スポットとしてのカフェやショップ、レストランなどの出現は、この時期以降、ガイドブックの記述に反映されていくことになるが、これは、迪化街で世代群を中心にリノベーション事業が展開してきた時期に合致していると言える。『るるぶ台湾'15』(2014

年発行)で初めて話題のリノベスポットとして小藝埕、民藝埕、衆藝埕が紹介されている(77頁)。『るるぶ台湾16』(2015年発行)では、これらに加えて聯藝埕が紹介されている(62頁)。また、このような時期において、レトロ散歩やレトロウォークなどの用語が使われている点は重要である。これは、おしゃれな感覚を伴った新しい迪化街の楽しみ方を提示するものとなっている。

トラベルライターの高永は、2010年代における迪化街の変容について、以下のような興味深い指摘をしている。

【資料3】取材の下見で迪化街をはじめてじっくりと歩いたのは2009年末のこと。当時の印象は、「漢方薬の匂いのする地味な町」であり、「女子向きとはいえない町をどんなふうに取り上げればいいのか」と頭を悩ましたものだった。その頃、日本人が迪化街に行く目的といえば、カラスミを買うか、台北霞海城隍廟で良縁祈願するか。二択という感じだったのだ。ところが2011年、1917年に建てられたビルをリノベーションした「小藝埕」が開業。これを契機に「民藝埕」、「聯藝埕」など、古い建築を再生したスポットが続々と登場する。ファッションや雑貨などを扱うショップ、カフェが入り、迪化街ならではの魅力的なスポットとして人気を集めるようになった。いまでは、ショッピングやカフェ巡りを目的に多くの日本人女子がこの街を訪れている[高永 2017: 139]。

その特徴を「大人カワイイ女子旅案内」と位置づける「女子旅ガイドブック」の決定版、『ララチッタ台北』(JTBパブリッシング、2015年)では、迪化街でリノベーションが進行中である点について「漢方薬や乾物などの問屋が立ち並ぶ昔ながらの街・迪化街に若手クリエイターの個性派ショップが増加中。レトロな建物をリノベしたビルに、雑貨店から

レストランまでニューフェイスが集まっている。」(15頁)としている¹⁰⁾。

旅のかたちや目的は人それぞれで、多様である。しかし、近年の「女子旅」に共通するテーマは、タイムスリップの感覚によって日常の現実から一時離れ、どこか温かみや懐かしさを感じられる場所でノスタルジーに浸り、疲れた心と身体をリフレッシュし、癒やされることである。こうした消費ニーズに応えるのに、リノベーションによって装いを改め、おしゃれな観光スポットに変貌を遂げたレトロな空間や事物は最適である。迪化街は「女子旅」の対象として、異郷であっても容易くアクセスできる手頃な「ワンダーランド」[阿多・谷口・富永 2014]なのである。リノベーションによって新たに生まれ変わった部分と旧来の問屋街の雰囲気 mixes した新旧融合の状態が魅力的な価値を帯びている。レトロという、独特の響きを伴った概念装置はそのような旅人の気分と響き合っていると言える。

V おわりに

老朽化した商業街や歴史的建築物に対して、リノベーションによって新たな機能と価値を付与し、観光スポットとして活性化した事例は数多い。台北を代表する「老街」の一つ、大稻埕エリアの迪化街は歴史的景観の保全地区に指定されて以降、観光資源として活用されているが、地域社会やコミュニティ、地域アイデンティティを再構築することにも結びつけられている。

すでに見てきたとおり、今日、迪化街は大稻埕エリアに位置する魅力的な問屋街として地位を確立し、人気のある台北の主要な観光スポットとなっている。日本国内で刊行される旅行ガイドブック、さらには観光情報を扱うウェブサイトでは「レトロ(な)問屋街」「レトロ(な)街」、「レトロタウン」などと紹介され、そのイメージが拡散されている。歴

史あるレトロな建物を改装したりノベスポットが出現し、これに拍車をかけている。そうした中で、台北市政府、旅行者、職人、デザイナー、学者、郷土史研究者、商店主など、様々な主体が複雑に関係しあい、観光に関わる文化的コンテンツの創出が試みられている。

レトロなスポットや事物は観光消費の対象になり、観光空間を構成する必須のアイテムとなっている。観光情報を提供する媒体はもはやガイドブックばかりでない。迪化街を紹介するウェブサイトでは「レトロ」をともなった用語を多数拾うことができる。街（町）並み、建造物、景観、洋風建築、雰囲気、問屋街、商店、商店街、建築、茶芸館、カフェ、デザイン、フォトスポット、食器、古い建物、茶館、雑貨屋、外観など様々な事物に対してレトロが冠されているのである。小論で試みた台北市の大稻埕・迪化街の事例分析¹¹⁾は、東アジア諸地域の観光空間や観光文化の比較研究において有益な視点を提供するものと思われる。

〈注〉

- 1) 大稻埕エリアの迪化街の歴史的景観の保全については、美・浅野・浦村（2005）の調査研究がある。これによれば、①拡幅計画再検討期（1977年～1988年）、②街並み調査期（1988年～1990年）、③保全事業始動期（1990年～2000年）、④特定専用区制度運用始動期（2000年～現在）と区分し、それぞれの時期の特徴を整理している。迪化街の形成過程やその変遷については、シンガポールやマレーシアの華人居住区におけるショップハウスとの比較検討が有益である。泉田英雄（1990）、ニアイリーン・高木・阪田・西村（2005）を参照。
- 2) 1977年の改正以前の枠組みでは古跡に指定された建物・敷地の開発

権が補償されず、所有者の反発を招いていた。この傾向は迪化街でも同様であった。1983年に迪化街の一部がセットバックされ、景観の変化を目の当たりにした市民やNGOなどが強く反発し、1980年代後半から迪化街の保全運動が活発になった（柏原・楊・鈴木・窪田 2015：481）。

- 3) 大稻埕の「歴史」を掘り起こす作業は地元出身の知識人が中心になって進められた。すでに1997年6月から「大稻埕逍遙遊」という、史跡や文物を見て回る一般市民を対象にした学習活動が行われていたが、その拠点となったのは「莊協発・港町文史講亭」である。2010年に改修された後、大稻埕の歴史と文化を学ぶ施設として再生した [片倉 2014、TRAVELLER Luxe 旅人誌編輯室 2016：12、莊永明 2017（2012）：8-50]。
- 4) 金康嵐 2016「大稻埕1920年代の風景を再現 伝統に新風を吹き込む 周奕成氏」(<https://www.travel.taipei/ja/news/details/8128>、最終閲覧日：2019年11月26日)
- 5) これらのリノベーション施設の経営者は大稻埕エリアの迪化街における新たな観光文化の担い手でもある。2015年にはBookstore 1920s（二十年代書店）、褶子劇団、蔣渭水文化基金会などが共同発起人となり、同年10月、第1回「大稻埕国際芸術祭」を開催した。1920年代の時代の雰囲気復活し、「一起狂騒」をキャンペーンのテーマとし、国内外の創作者やプロデューサーを招聘し、地元の文化単位を結びつけた。10月1日から31日まで芸文パフォーマンスを開催し、「時空劇場—1920変装遊行」が話題を呼んだ。これはアートフェスティバルへと発展している (<https://www.artyard.tw/一路狂騒%ef%bc%81大稻埕國際藝術節-帶你重回1920年代/>、最終閲覧日：2019年11月26日)。

- 6) 今日、レトロを関した表現用語は、函館、横浜、神戸、長崎、京都、大阪を初め、日本各地の観光地で広く用いられている。レトロという用語が観光開発で登場するのは1995年にオープンした「門司港レトロ」が早い事例である [高野 2018 : 238-243]。
- 7) 『交通公社のるるぶガイド17 台北・高雄』（日本交通公社出版事業局、1988）には迪化街についての言及はなく、その後の『JTBのポケットガイド149 台北・高雄』日本交通公社出版事業局、1999）、『JTBのポケットガイド138 台湾』（2000年）においても記述がない。『ワールドガイドアジア⑨ 台湾』（日本交通公社出版事業局、2000年）において初めて「迪化街」という項目が設けられ、「台湾最大級の漢方薬&乾物問屋街。細い通りに漢方薬や乾物を扱う店がひしめく、活気にあふれた台北最古の商店街だ。歴史を感じるアーケードは商品があふれ、通路は人一人とおるのがやっと。品揃えの豊かさや値段の安さから一風変わったみやげ物選びや漢方薬を買いに来る観光客も多い。」(85頁)としている。同ガイドブックはその後、2007年まで版を重ねたが、迪化街の記述に変化はなく、前述の2000年の内容が書かれている。
- 8) 小倉千明 2018「注目の台湾！台北のリノベーション事情を現地で探る」参照 (https://www.homes.co.jp/cont/press/buy/buy_00742/、最終閲覧日：2019年11月26日)。
- 9) 台湾では日本統治時代の建築物の改修や再建が各地で進行している。1895年の日清戦争講和条約から1945年の敗戦まで、日本は台湾を植民地として統治した。その間、台湾総督府は台北の都市建設を進め、多くの公共建築を建設した。迪化街を含む、大稻埕地区にもこうした公共建築が残存している。これらの建築物は、現地の人々にとっては植民地統治の歴史記憶と関わる負の遺産であった。しかし1990

年代になると、日本統治期の建築物も古跡と認められるようになった。こうした変化は台湾人の歴史認識やアイデンティティといかなる関係にあるのか、なぜ「レトロ建築」としてリストアップされるようになったのか、などの検討は重要な研究課題であろう。西澤(2009)、片倉(2019)を参照。

- 10) 迪化街のリノベーションの進行については、『るるぶ』以外のガイドブックでは『空旅Style 台湾』（成美堂出版、2015：104頁）が「古い建物の中には、漢方店や布問屋などの老舗が多く入っているが、近年はリノベーションした新しいショップもオープンしている。」と記述している。JTBパブリッシング刊行のガイドブックでは、同様の内容が『ソロ旅 台北』（2016年）や『ララチッタ02 台北』（2015年）にも見られる。すなわち、「“百年老店”とよばれる老舗が並ぶレトロエリア、迪化街にリノベ系の複合商業スポットや若きクリエイターによるおしゃれな雑貨ショップなどが急ピッチで増加中。変わりゆく街の“今”を感じにソロ散歩にでかけよう。」(38頁)と記述している。
- 11) 今回は、資料整理が十分でなかったこともあり、個人向けの旅行ガイドブックの先駆的な存在とも言える『地球の歩き方』（ダイヤモンド社）を分析対象にできなかった。この他、『るるぶ台北』（JTBパブリッシング）をはじめ、『まっぷる台湾』『まっぷる台北』（昭文社）などの観光情報誌も重要な資料と言える。これらを用いたさらなる比較検討は今後の課題である。

1. 参考文献

- 阿多静香・谷口佳恵・富永直美（2014）『台湾おしゃべりノート』東京：
ダイヤモンド・ビッグ社。
- 五島寧（1999）「日本統治下台北面街孟甲・大稻埕の街区形成に関する
研究」『土木史研究』53-62頁。
- 片倉佳史（2014）「台湾文化の発源地・大稻埕を訪ねる その2」『交流』
2014.9、No.882、10-20頁。
- 片倉佳史（2019）『台北・歴史建築探訪 日本が遺した建築遺産を歩く』
東京：ウェッジ。
- 片倉真理（2018）『台湾探見ーちょっぴりディープに台湾体験』東京：
ウェッジ。
- 柏原沙織・楊惠亘・鈴木伸治・窪田亜矢（2015）「台北市大稻埕におけ
る歴史保全ツールとしての容積移転の運用とプロセスー容積送出
敷地の歴史的環境に与える影響に着目してー」『都市計画論文集』
Vol.50, No.3, 480-487頁。
- 泉田英雄（1990）「シンガポール都市計画とショップハウスー東南アジ
アの植民地都市とその建築様式の研究 その1」『日本建築学会
計画系論文報告集』第413号、161-172頁。
- ンアイリーン・高木真人・阪田弘一・西村征一郎（2005）「マレーシア・
ペナン島のショップハウスに関する研究 ジョージタウン市におけ
る伝統型ショップハウスの空間構成について」『日本建築学会計
画系論文集』70（第597号）、1-7頁。
- 西澤泰彦（2009）『日本の植民地建築ー帝国に築かれたネットワーク』
東京：河出書房新社。
- 小牟田哲彦（2019）『旅行ガイドブックから読み解く明治・大正・昭和
日本人のアジア観光』東京：草思社。

- 李東明・波多野純・周世璋（2012）「台湾におけるアーケード付き街屋建築の研究」日本大学生産工学部第45回学術講演会概要（2012-12-1）、1179-1182頁。
- 美吟・浅野聡・浦村益郎（2005）「台北市大稻埕地区における歴史的環境保全計画に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』第592号、123-130頁。
- 高野光平（2018）『昭和ノスタルジー解体』東京：晶文社。
- 高山陽子（2018）「女子旅におけるアジアの表象」『亜細亜大学国際関係紀要』27（1・2）、49-74頁。
- 富永直美（2017）「女子ゴコロをわしづかみ！？ 激変するオールドタウン迪化街」『旅の賢人たちがつくった台湾旅行最強ナビ』東京：辰巳出版。
- TRAVELLER Luxe 旅人誌編輯室（2016）『台北大稻埕，偶見舊城新風景』台北：墨刻出版。
- ジョン・アーリ著・加太宏邦翻訳（1995）『観光のまなざし－現代社会におけるレジャーと旅行』東京：法政大学出版局。
- 王怡人（2015）「地域振興：集客力と商業機能の向上－台湾の商圈再生のケースを通じて」『流通科学大学論集（流通・経営編）』27-2、17-34頁。
- 殷寶寧（2016）「創意街區、飲食文化與都市再生：臺北市大稻埕迪化街美食地景與文創轉向」『文資學報』國立臺北芸術大學文化資源學院、第10期、29-66頁。
- 張倫（2018）『老街誌』台中：晨星出版。
- 莊永明（2017〔2012〕）『台北老街』台北：時報文化出版。
- 横山透（2019）『台湾百年ストーリー－20の物語に会う旅』東京：辰巳出版。

岩田晋典（2010）「渡航自由化以降に出版された海外旅行ガイドブックに関する基礎的研究」『立教大学観光学部紀要』第12号、5-31頁。

2. ガイドブック・観光情報誌

『交通公社のるるぶガイド17 台北・高雄』東京：日本交通公社出版事業局、1988年4月1日発行。

『JTBのフリーダム⑩ 台湾自遊自在』東京：JTB出版事業局、1997年9月1日初版。

『ブルーガイド・ワールド23 台湾』東京：実業之日本社、1998年1月13日発売。

『JTBのポケットガイド149 台北・高雄』東京：日本交通公社出版事業局、1999年8月1日、9版。

『JTBのポケットガイド138 台湾』東京：日本交通公社出版事業局、2000年10月1日、4版発行。

『ワールドガイドアジア⑨ 台湾』東京：るるぶ社、2000年10月1日発行。

『空旅Style 台湾』東京：成美堂出版、2015年7月20日発行。

『わがまま歩き37 台北』東京：実業之日本社、2011年4月1日発行。

『タビトモ台北』東京：JTBパブリッシング、改訂4版、2012年11月1日発行。

『ララチッタ 台北』東京：JTBパブリッシング、2015年7月1日初版発行。

『わがまま歩き18 台湾』東京：実業之日本社、2013年7月19日発行。

『ソロ旅 台北』東京：JTBパブリッシング、2016年2月27日

『るるぶ台湾'02』東京：JTBパブリッシング、2001年12月1日初版発行。

『るるぶ台湾'03』同、2002年12月1日初版発行。

『るるぶ台湾'04～'05』同、2004年7月1日初版発行。

- 『るるぶ台湾'05～'06』同、2005年7月1日初版発行。
『るるぶ台湾'07』同、2006年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'08』同、2007年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'09』同、2008年11月1日初版発行。
『るるぶ台北'10』同、2009年6月1日初版発行。
『るるぶ台湾'10』同、2009年11月1日初版発行。
『るるぶ台北'11』同、2010年5月1日初版発行。
『るるぶ台湾'11』同、2010年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'12』同、2011年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'13』同、2012年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'14』同、2013年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'15』同、2014年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'16』同、2015年11月1日初版発行。
『るるぶ台湾'17』同、2016年11月1日初版発行。



図1 迪化街
(2019年8月23日撮影)



図2 台湾グルメ
(2019年8月23日撮影)



図3 乾物店
(2019年8月23日撮影)



図4 漢方薬の老舗
(2019年8月23日撮影)



図5 小藝埜
(2019年8月23日撮影)



図6 民藝埜
(2019年8月23日撮影)



図7 陶磁器を扱う店舗
(2019年8月23日撮影)



図8 工芸品店
(2019年8月23日撮影)